

浄土

monthly
JODO

令和4年 通巻968号

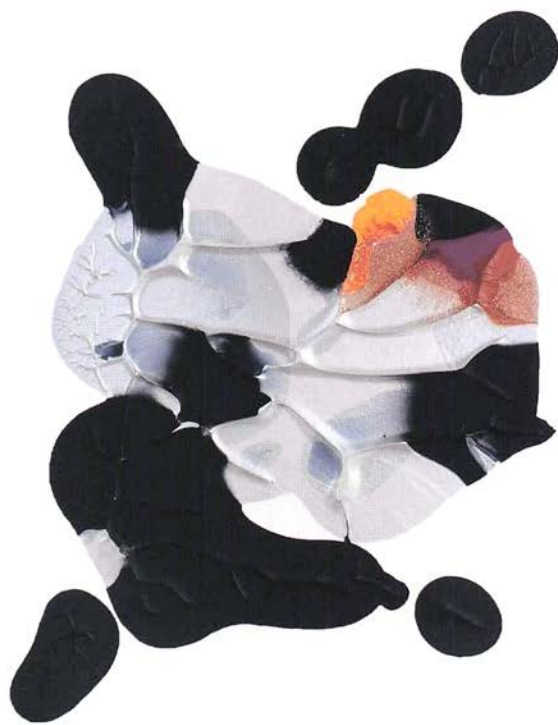
2022

November
vol.88
no.968

11

寺院紀行

東京・文京区 十方寺 真山 剛



みんなの境内

ふっふっ放談

知られざる戦前の浄土宗青年会の歴史を紐解く！ 赤坂明翔

浄土真宗本願寺派を知ろうその2 高願寺宮本義宣

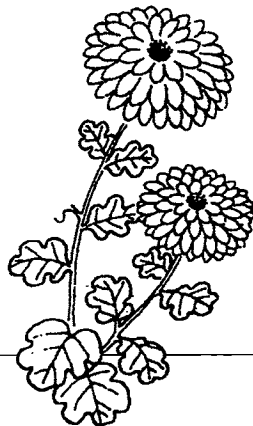
浄土

2022/11月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 東京・文京区 十方寺	真山 剛	1
寺院紀行 東京・文京区 十方寺.....	真山 剛	6
法然上人の言葉⑦ 石に水をかける	阿満利磨	14
寺々刻々⑳ 吉田・安倍両首相の国葬と信仰.....	鶴飼秀徳	18
ぶつぶつ放談 浄土真宗を知ろう その2	宮本義宣	22
漫画「浄土宗のお祖師様」三祖良忠上人⑮	ぐんじまん	31
林海庵・開教奮闘記 浄土宗僧侶への道	笠原泰淳	34
みんなの境内 日本各地の徳本名号塔	石川達也	39
あなたもお寺のCIO ⑧ 情報の真正性	小路竜嗣	40
微風吹動 伝説、その土地の持つ力	名和清隆	44
江戸日本の街道探訪 第19回 日光街道 2	森 清鑑	48
みんなの境内 戦前の浄土宗青年会	赤坂明翔	55
編集後記.....		56

表2 古物漂流⑲

三宅政吉



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙絵=清岸寺第四十四世 原口正弘

アートディレクション=近藤十四郎

開教奮闘記

4

浄土宗僧侶への道

林梅庵開山上人

笠原泰淳



かさはら たいじゅん
昭和三十三年東京生まれ。慶応大学経済学部卒。
日本通運（株）に入社、八年勤務し浄土宗東京
教区貞源寺の故藤木芳清師に師事。佛教大学に
学び、浄土宗僧階取得。東京教区心光院に約十
年勤務。平成十四年「林梅庵」設立、翌年林海
庵が浄土宗寺院に承認され住職となる。現在、
浄土宗開教振興協会副理事長。

あるとき、神奈川県在住の二十代の女性からメールを頂いた。

「一般の人でも参加できる念仏会をやっているお寺を知りませんか。」

その方は、ふだんは禅宗のお寺の坐禅会に参加しているとのこと。坐禅中に精神集中をよく保っているかどうかを大事にしてきたらしい。ところがふと、疑問に捉われた。病気などの理由で心の集中状態を保てない人はどうなるのか。そのような人は坐禅の道からはじかれてしまうのか。(ご自身のことかどうかは分からない。)それでお念仏に関心をもったとのこと。

これはまさしく、時代を超えた問いである。聖道門か浄土門か。どちらを進むのか。

法然上人は『選択集』冒頭で道綽禅師の聖浄二門判を引かれ、

「たとひ先より聖道門を学する人といふとも、もし浄土門において、その志あらば、すべからく聖

道を棄てて浄土に帰すべし。」

と言われている。そしてこれは、私自身の問題でもあった。私事で恐縮ながら、少しだけおつき合い頂きたい。

私が仏教と出会ったのは、私が二十一歳のときのことであった。大学に入った頃は、将来マスコミ業界に進み、テレビの仕事をしたいと思っていた。「マスコミに進みたいのなら、在学中から人間関係を作っておいた方がいいよ」——友人からこのような助言を受けた。それでマスコミ志望者のための私塾に通ったり、ある放送作家についてテレビやラジオの番組構成の仕事させてもらったりした。だが、そうした中で次第に「自分にはとても無理だ」と大きな挫折感を感じるようになってきた。当時接していた方々、現場の第一線で活躍している方々は、あらゆる点で私ごとときにはまったくかなわない人たちであった。経験、情報力、知

力、人間力……年はさほど離れていないのに、自分が逆立ちしても届かないような人ばかりだったのだ。学生であつた自分がそういうプロの人たちと張り合おうというのが土台無理な話なのだが、当時の私は希望が完全に断たれたように思い、途方に暮れていた。

ふと手に取つたのが仏教書。そこには「一切は空」と説かれているではないか。当時は自分の経験値を上げ、知力を鍛え、自分なりの価値観をつくってゆくのが若者として当たり前、そう思っていた。ところが一切が空？ 知識も無駄、経験もいらぬ？ そもそも「自分」なんてない？ これは大袈裟ではなく、まさしく天地がひっくり返るような驚きだつた。

それが私と仏教との出会いであつた。

しばらくは禅の本を読んだりヨーガを学んだりしていたが、いくつかの点がはつきりしてきた。

まず、仏の世界、覚りの世界というものが確實

に存在するということ。『ダンマパダ』『スツタニパータ』などの釈尊のお言葉を読むと、それが実際にある、彼方の世界から流れ出ているのがはつきりと感じられた。とてもこの世からやつてきた言葉とは思えない。仏の世界というのはただの物語ではない。どこかに―自分の心の底なのか、宇宙の彼方なのかは分からないが―確実に存在する。このように思つた。

次に、わが身を振り返ると、覚りの世界からはるかにかけ離れていることがよく分かつた。つまりらないプライドや煩惱に支配されている情けないこの身であつた。仏教に心惹かれ、釈尊や先達の言葉に感動するといつても、生身の自分から欲や悩みがすべて消えてしまったわけではない。

また、自分が「犀の角のように」ただ独り歩むのではなく、同行の仲間と共に歩みたいと願っていることにも気づいた。禅やヨーガは素晴らしいとは思ふものの、自分の終の棲家ではない。仲間



仏教への熱き思いを語る笠原住職

と共に歩める道を行きたい。それが私の願いであった。

そしてもう一つ。死の問題である。

『チベットの死者の書』という本をご存知だろうか。チベット仏教の一派に伝わる仏典で元の名を「バルド・トウ・ドル・チェンモ（中有において

聴聞することによる解脱）」という。いわば枕経・中陰用の読経経典である。内容は、死の瞬間から始まるプロセスを描写し、そこに介入して死者を解脱またはより良い転生へと導くガイドブックだ。1960年代に欧米で話題となり、70年代になつて邦訳が出版された。

この世に生きている間だけでなく、死んだ後でも仏弟子として成長することができるのか。禅やヨーガにはない教えだ。私が感銘を受けたのはまさにそこだった。「死者の書」に描写される様々な場面についてはあまり実感が湧かなかったが、死後の成長の可能性については大いにありそうに思われた。

だが、振り返ってみるとわが日本にも同じような教えが伝わっているではないか。浄土教だ。

仏の世界は実在すると思う。だが自分はそのからは遠くかけ離れている。独りではなく道友と共に歩みたい。そして死後の成長（往生く成仏）を

願いたい。たまたま家の宗派が浄土宗だったので、浄土宗の教えを学び始めた。

浄土宗ではお念仏を称えていればよい——それは子供の頃から知っていたが、法事の時のマナーくらいにしか思っていなかった。先に書いたように、私が仏教に関心をもつようになったのは「空」の教えがきっかけである。さらに大乘仏教に説かれる悉有仏性、三界唯識、法界縁起などの思想はまさに目を見張るような豊かな世界を見せてくれた。「ただお念仏を称えていればよい」という教えは、当時の私には単調であり魅力に欠けるものだった。

だが、『チベットの死者の書』と出会ったあと浄土宗の入門書を読み、本当に驚いた。

そこに説かれていたお念仏の教えは、

- ・瞑想修行の必要がない。
- ・難解な経典を学ぶ必要もない。
- ・理解を求めて師から師へとをわたり歩く必要も

ない。

- ・万人が往生、そして成仏できる。
- ・経典に明確な根拠がある教えである。
- ・宗祖法然上人は素晴らしい学徳、人徳をそなえておられる。

素人の私にもこれらの要点がすぐに理解できた。これは明らかに、『チベットの死者の書』の教えよりもはるか先を行っている。まさしく「究竟大乘」、大乘仏教の極致ではないか。

浄土宗で僧侶の道を歩むことがもし可能であるならば、是非ともそうしたい。こうして私は浄土宗である菩提寺の門を叩いた。

初めての仏教との出会いから法然上人にたどり着くまでに十年ほどかかった。ようやく終の棲家が見つかった。

それが、浄土宗教師としての人生だった。

(つづく)